The determinant factors of the adjustment to school athletic clubs

Kazuhito Katsura¹ and Shiro Nakagomi²

Abstract

The purpose of this study was: 1) to clarify the determinant factors of the adjustment to school athletic clubs, 2) to develop a means of measuring adjustment to school athletic clubs and 3) to examine the relative significance of the factors from a developmental point of view. The subjects were 671 junior high school students, 462 high school students and 515 university students participating in school athletic clubs and they composed three age groups. Concerning 64 items related to adjustment feeling, all the subjects were asked to rate their feeling on 7-point scales. Principal factor solution method with normal varimax rotation, ANOVA and multiple regression analysis were applied to analyze the data.

The main findings were as follows:

1) Five factors which were named “self-competence in the club (FAC1)”, “cognition of leader and leader’s management (FAC2)”, “restriction/restraint feeling (FAC3)”, “commitment to the sport and the club (FAC4)” and “cognition of the team mates (FAC5)” respectively, were clarified as the determinant factors of the adjustment to school athletic clubs.

2) A 42-item self-report scale, yielding indices of five aspects of adjustment as well as a summarized adjustment feeling score, was developed. Both reliability and validity of the scale were assured, and the scale was considered to be an adequate means of measuring adjustment to school athletic clubs.

3) In each of three groups of subjects, the 5 factors were different in the strength of relative significance, and the order of its strength were different among the subject groups, as follows: In the junior high school student group, FAC4>FAC2>FAC1>FAC3>FAC5, in the high school student group, FAC3>FAC1>FAC5>FAC4>FAC2, and in the university student group, FAC5>FAC1=FAC3>FAC4>FAC2.

ことを示している。吉田27)も、現代の中学、高校生の生活を家庭、学校、社会の3つに分けた場合、学校生活が中核をなし、彼らにとって、この学校生活への適応が重要な課題となると捉えている。しかし一方では、Baker and Siryk28)や清29)は、適応と不適応と学校生活の関連性についての体系的な研究が、きわめて少ないことを指摘している。

体育・スポーツ心理学の分野においても適応の問題はあまり取り扱われていないようである。運動部活動における適応の問題を実証的に取り扱った数少ない研究として高田ら18)19)20)の研究が上げられる。彼女たちは、運動部活動における不適応が起因となって神経症病状の症状を呈した多くの事例を報告し19)。また、部活動体験がその活動を終えた後の自尊感にまでネガティブな影響を及ぼす場合があることを明らかにしている18)20)。これらの研究から覚えように、部活動と強く関わりを持って学校生活を送っている運動部員にとっては、運動部活動における適応感がその後の性格活動へ強い影響を及ぼす要因となり、全体的な人格適応感を規定していくこととなっている。

このように部活動への適応の問題は、体育・スポーツ心理学の分野でも1つのテーマとなるべき問題であり、広義には集団研究に含まれるものである。しかしながら、従来、体育・スポーツ心理学領域で行なわれてきた集団研究の多くはパフォーマンスに関連づけられ、成員の精神活動自体に焦点づけられたものはない。「スポーツ集団の特異性尺度」や「運動部のモラール調査票」30)により、集団の成員個々の適応状況を間接的に推論することは可能であるが、これらの尺度を用いた研究は集団全体の機能について検証しようとするものであった。個人の精神活動に焦点を当てた研究としては、例えば、「体育授業好意」31)や最近ではパーコンプトン11)12)などの研究が見られる。しかし、これらの研究の対象とするところは個人的精神的状態が典型的に現実化する一部の者たちである。こうした研究は、個人のおかれている精神状態をネガティブな側面から探ることにより、より健全な精神状態で体育・スポーツ活動を行なっていくための基礎資料を提出しようとしているものと考えられる。部活動は、新入部員にとっては新環境であり、その新環境への適応を図ることが多くの部員にとって最初の課題となる。そこで、より一般的な部員を対象としてポジティブな側面から部員の探究が必要である。1人1人の部員の適応感や適応過程、適応状況を評価する尺度の作成に関する研究は、部員をポジティブに側面から捉える研究であり、部員が精神的に健全な状態で活動を続け、その後の性格適応にも良好な影響を及ぼすような活動を指導、運営していく為の資料を提供するものと考えられる。

本研究は、このような立場から、部活動活動における適応の問題を体系的に研究していく為の第1歩として、部活動活動に参加する中学生、高校生、大学生から広く資料を得、これらの資料を分析することにより、1)運動部活動における適応感を規定する要因の解明、2)各規定要因を反映する下位尺度から構成され、多側面から部員の適応感を評定し得る「運動部活動における適応感規定尺度（Adjustment Scale for School Athletic Clubs以下ASSACと略す）」の作成、3)発達的な観点から、各要因における適応感への影響度の検討を行いものである。

方 法

1. 調査対象

中学生運動部員671名（男女1年生174名、2年生194名、女子1年生135名、2年生168名）、
高校生運動部員462名（男女1年生173名、2年生125名、女子1年生98名、2年生66名）、
大学生運動部員515名（男女1年生113名、2年生150名、3年生114名、女子1年生46名、2年生52名、
3年生40名）の計1,648名から有効資料を得、これらの者を調査対象とした。

なお、対象の選択にあたって、被調査者の属する運動部の種目、競技成績、部の権限構造な
どの環境に偏らないように心がけた。この結果，競技種目は，中学生で14種目，高校生で18種目，大学生で16種目にとどまり，また，競技成績も全国大会優勝から市町村大会出場程度まで様々となった。しかし，レクリエーション指向の部に属する者と競技指向の部に属する者の適応規定要因は大きく異なると考えられる。今回の調査にあたっては競技指向の運動部に属している者を対象とし続けた。なお，高等学校にある者は，部活動への参加状況が一定でないこと，図書館のデータの混入の恐れの有することから調査対象としなかった。

2. 調査時期

運動部活動における適応感の安定する時期を考慮し，10月および11月に調査を行なった。

3. 調査内容（質問紙）

先ず，調査項目を作成するために，中学生31名，高校生70名，大学生56名，計175名の運動部員を対象として，次のような5つの質問に対し自由記述による回答を求めた予備調査を実施した。5つの質問は，入部時における運動部活動への期待，現時点における適応，不適応，部への要求，自分への要請等を問うものであった。それぞれ具体的には，「どのようにことを期待して今のクラブに入りましたか？」「現在，自分が今のクラブにあっている，または，むいていると感じることがあるのは，どのような事があった時や，どのような感じを持った時ですか？」「自己，自分が今のクラブにあっている，または，むいていると感じることがあるのは，どのような事があった時や，どのような感じを持った時ですか？」「あなたは，クラブがどのように変わればよいと思ってですか？」「先生や他のクラブの人たちは，あなたがどのように変わればよいと思っていると思いますか？」という質問文であった。

先ず，得られた回答を分類，整理し63項目を抽出し，さらにこれを補う為にBaker and Siryの学校生活への適応を測定する尺度，学級適応診断検査，豊島の研究より運動部活動における適応とも関わる項目を抽出し，若干図表を修正したうえで9項目を加えた。また，ワーディングについては，3名の中学生と1名の高校生に協力を得，本研究者らと共に検討し，解りやすい表現となるように修正していった。続いて，臨床心理・心理テスト作成の専門家1名，学校教育現場における運動部活動の指導者3名，体育・スポーツ心理学の専門家2名のそれぞれ立場の異なる6名の専門家により，全72項目の内容の妥当性について検討が加えられた。6名中4名以上が妥当であると認めたことを判定基準として項目の精錙を計ったところ，62項目が残った。調査は，この62項目に運動部活動における総括的適応感（summarized adjustment feeling，以下SAと略す）を評定する2項目を加え，計64項目にそれぞれ「非常にそう思う」から「全然そう思わないと」までの7段階尺度で回答を求めた暫定的適応感評定尺度により実施した。64項目の詳細については表1に示した。この尺度の他に，高校生，大学生には，作成される適応感評定尺度の妥当性を検討する為，「スポーツ集団の集団適応尺度」及び「運動部のモラール調査票」も同時に実施した。また，一部の指導教官に対しても，不適応状況にあると考えられる部員を示すように求めた質問紙を配付した。

4. 調査方法

調査は，当該校の体育館，あるいは部の練習場において，本研究者並び本研究の内容を熟知した学生数名によって実施された。なお，実施方法，調査者が読み上げる質問項目に対して逐次回答させる集合調査，強制速度法であった。

結果と考察

1. 運動部活動における適応感を規定する要因

運動部活動における適応感を規定する要因を探る為に，主成分分析の手法を用いることとして，先ず，暫定的適応感評定尺度の回答について，予備的に各発達年代ごとで主成分分析を行なったところ，その因子構造に大きな違いは認められなかった。このことに加えて，本研究で
は、それぞれの発達年代における適応性規定因子の相対的関係を検討するに際して、各種発達年代全体に適用可能な尺度を構成することも目的の1つであった。そこで、得られた資料を総合して処理を行なった。その手続き、および結果について以下に記し、回答に著しい偏りのあった8項目、及びSAを評価する2項目を除く54項目の回答について主成分分析・バリックス回転を行なった。因子数の決定は、因子の解釈可能性から検討し、さらに固有値の変動状況を考慮した上で5因子とした（表1）。因子の解釈は、因子負荷量0.40以上の項目の内容から検討した。なお、2つの因子に同時に高い負荷量を示した2項目については、内容から判断してどちら一方の因子に取り上げた。

抽出された第1因子は、自己の運動技能の優劣に対する認知に関する項目とこれに影響を与えると考えられる部内における自己存在価値に対する認知に関わる項目より構成されていることから「部内における自己有能感」と命名した。第2因子は、指導者に対する認知、あるいは部の運営に対する認知に関わる項目より構成されていることから「部の指導者・運営」、第3因子は、自己が部の活動を継続していく上で

### 表1. 評定尺度の項目および主成分分析結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>因子名</th>
<th>項 目</th>
<th>内 容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><strong>最も適応性規定因子（SA）</strong></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>101</td>
<td>今までの部の生活で、全体としてうまくいっている (SA)</td>
<td>F1</td>
</tr>
<tr>
<td>102</td>
<td>これらの部での生活は、全体としてうまくいかないと思う (SA)</td>
<td>F1</td>
</tr>
</tbody>
</table>

<table>
<thead>
<tr>
<th>因子名</th>
<th>項 目</th>
<th>内 容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>109</td>
<td>技術に関して、私は部の指導者や仲間の期待にたたることができ</td>
<td>0.75</td>
</tr>
<tr>
<td>103</td>
<td>私の運動能力（運動神経）で、部の活動に参加できる</td>
<td>0.71</td>
</tr>
<tr>
<td>120</td>
<td>私は、部にとって必要な人間であると思う</td>
<td>0.68</td>
</tr>
<tr>
<td>04</td>
<td>私の体力で、部の活動についての</td>
<td>0.63</td>
</tr>
<tr>
<td>108</td>
<td>私は自分の努力に応じた技術を身につけている</td>
<td>0.62</td>
</tr>
<tr>
<td>07</td>
<td>部の活動をとおして、私は大体自分に期待していたとおりの能力を身につけている</td>
<td>0.61</td>
</tr>
<tr>
<td>157</td>
<td>私は、部の一員としてふさわしい人間であると思う</td>
<td>0.59</td>
</tr>
<tr>
<td>06</td>
<td>部の活動に、私は技術的にいける (F)</td>
<td>0.58</td>
</tr>
<tr>
<td>130</td>
<td>部の中で、私には、果たすべき役割がある</td>
<td>0.56</td>
</tr>
<tr>
<td>105</td>
<td>私の体格 (体型) は、部の活動における</td>
<td>0.56</td>
</tr>
<tr>
<td>133</td>
<td>私は、部の指導者に満足している</td>
<td>0.48</td>
</tr>
<tr>
<td>134</td>
<td>私は、部の指導者に満足している</td>
<td>0.47</td>
</tr>
<tr>
<td>137</td>
<td>部の指導者に満足している</td>
<td>0.42</td>
</tr>
<tr>
<td>135</td>
<td>部の指導者に満足している</td>
<td>0.40</td>
</tr>
<tr>
<td>132</td>
<td>部の中で、私の実力は正しく評価されている</td>
<td>0.13</td>
</tr>
<tr>
<td>114</td>
<td>部の活動において、私の目標を達成している</td>
<td>0.62</td>
</tr>
<tr>
<td>139</td>
<td>部の活動効率に満足している</td>
<td>0.59</td>
</tr>
<tr>
<td>141</td>
<td>部の活動効率に満足している</td>
<td>0.42</td>
</tr>
<tr>
<td>118</td>
<td>部の活動において、私の技術は適切なアドバイスをしてくれる</td>
<td>0.55</td>
</tr>
<tr>
<td>142</td>
<td>部の活動において、私の技術は適切なアドバイスをしてくれる</td>
<td>0.22</td>
</tr>
<tr>
<td>160</td>
<td>私の部活動で、選手ひとりひとりの意味を大切にしている</td>
<td>0.13</td>
</tr>
<tr>
<td>161</td>
<td>私は、部の活動で、私は自分の決断力がよくある (F)</td>
<td>0.19</td>
</tr>
<tr>
<td>149</td>
<td>部に入っていることで、私は自分のやる気を '../../../../../en/769/769'にしにくいことがある (F)</td>
<td>0.04</td>
</tr>
<tr>
<td>152</td>
<td>私は、部をやめてしまおうと考えることがよくある (F)</td>
<td>0.17</td>
</tr>
<tr>
<td>148</td>
<td>私は、部活動を強く持たない</td>
<td>0.18</td>
</tr>
<tr>
<td>154</td>
<td>私は、部活動を強く持たない</td>
<td>0.05</td>
</tr>
<tr>
<td>163</td>
<td>私は、部の部活動の目標を達成することを望んでいない (F)</td>
<td>0.04</td>
</tr>
<tr>
<td>150</td>
<td>私は、部活動の目標を達成することを望んでいない (F)</td>
<td>0.20</td>
</tr>
<tr>
<td>155</td>
<td>私は、部活動の目標を達成することを望んでいない (F)</td>
<td>0.18</td>
</tr>
<tr>
<td>157</td>
<td>私は、部活動の目標を達成することを望んでいない (F)</td>
<td>0.09</td>
</tr>
<tr>
<td>147</td>
<td>部に入っていること、私は将来に役立つ</td>
<td>0.11</td>
</tr>
<tr>
<td>146</td>
<td>部に入っていること、私は将来に役立つ</td>
<td>0.12</td>
</tr>
<tr>
<td>100</td>
<td>部に入っていること、私は将来に役立つ</td>
<td>0.09</td>
</tr>
<tr>
<td>110</td>
<td>部に入っていること、私は将来に役立つ</td>
<td>0.34</td>
</tr>
<tr>
<td>123</td>
<td>部に入っていること、私は将来に役立つ</td>
<td>0.18</td>
</tr>
<tr>
<td>124</td>
<td>部に入っていること、私は将来に役立つ</td>
<td>0.20</td>
</tr>
<tr>
<td>125</td>
<td>部に入っていること、私は将来に役立つ</td>
<td>0.38</td>
</tr>
<tr>
<td>126</td>
<td>部に入っていること、私は将来に役立つ</td>
<td>0.44</td>
</tr>
</tbody>
</table>
運動部活動における適応感を規定する要因

<table>
<thead>
<tr>
<th>欄目</th>
<th>訳文</th>
<th>設定</th>
<th>設定</th>
<th>設定</th>
<th>設定</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>124</td>
<td>私は、部の仲間に満足している</td>
<td>0.08</td>
<td>0.18</td>
<td>0.13</td>
<td>0.15</td>
</tr>
<tr>
<td>125</td>
<td>部の仲間は、私をもわかってくれている</td>
<td>0.21</td>
<td>0.19</td>
<td>0.04</td>
<td>0.15</td>
</tr>
<tr>
<td>130</td>
<td>私は、部の仲間どうしの関係に満足している</td>
<td>0.13</td>
<td>0.07</td>
<td>0.12</td>
<td>0.02</td>
</tr>
<tr>
<td>153</td>
<td>部活体の疎隔感は、私にあって</td>
<td>0.19</td>
<td>0.20</td>
<td>0.31</td>
<td>0.26</td>
</tr>
<tr>
<td>128</td>
<td>私には、部の中に誰かをみつける関係が</td>
<td>0.06</td>
<td>0.02</td>
<td>0.01</td>
<td>0.23</td>
</tr>
<tr>
<td>131</td>
<td>私は、部の上級生と下級生の関係に満足している</td>
<td>0.07</td>
<td>0.34</td>
<td>0.23</td>
<td>0.06</td>
</tr>
<tr>
<td>113</td>
<td>部の仲間の間には、お互いにうまくまかなうと要因がある</td>
<td>0.07</td>
<td>0.33</td>
<td>0.14</td>
<td>0.17</td>
</tr>
<tr>
<td>129</td>
<td>私は、部の仲間から取り残されたような気持ちになることが多い（F）</td>
<td>0.27</td>
<td>-0.03</td>
<td>0.25</td>
<td>-0.10</td>
</tr>
</tbody>
</table>

(ASA)の2項目は、予防的に行った主成分分析における固有値1以上の因子に対して、2項目とも特異の因子に高し、負荷を示さず、多くの因子に比較的高い負荷を示していた。」

は「ASSAC」に取上げた項目

を回答に著しい偏りがあったため主成分分析から除いた項目

（F）は反転項目

での制約、あるいは部の活動を継続する為に受ける束縛感に関わる項目である。これから「制約・束縛感、第4因子」、自己の選択した種目や部の活動に対して価値を認めコミットしているかに関わる項目より構成されていることから「種目・部活動へのコミットメント」と命名した。さらに、第5因子は、チームメイトに対する認知に関わる項目より構成されていることから「対チームメイト感情」と命名した。以上の結果、運動部活動における適応感を規定する要因はこれら5つの要因があると考えられる。

2. 「ASSAC」の作成

（1）項目分析

「ASSAC」を構成する項目については、先ずSAを評定する2項目を含むこととし、他の

に各適応感規定要因を代表する項目を取り上げることとした。項目の選択にあたっては、因

子ごとで負荷量の高い順に取り上げ、項目間に高い相関のみられたものはどちらかの項目で代

表させた。この結果、各項目を反映する5つの

の下位尺度に8項目ずつが取り上げられた。これら

の項目を表1に示した。さらにこれらの項目

が適切で、結果として運動部活動における適応

感を規定する尺度が構成できたかを確認する為

に、各規定要因を反映する5つの下位尺度内ごと、

全体尺度の両方で1-T相関分析を行なった。

結果、表2に示すように得られた値は、全

て1％水準で有意であり、尺度項目としてほぼ

満足できる値であった。このことから、下位

尺度はそれぞれ1次元尺度であり、また尺度全

体としても運動部活動における適応感を規定す

る1次元尺度が構成されたことが示された。作

成された尺度の構成、および5つの下位尺度名

の略称を以下に示す。

総括的適応感（SA）を評定するSA尺度（2

項目）

「部内における自己有能感」要因を反映する

FAC1尺度（8項目）

「部の指導者・運営」要因を反映するFAC2尺

度（8項目）

「制式・束縛」要因を反映するFAC3尺度（8

項目）

「種目・部活動へのコミットメント」要因を反
表2. 尺度を構成する各項目におけるI-T相関分析の結果

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>下位尺度</th>
<th>項目番号</th>
<th>下位尺度得点との相関係数</th>
<th>全体尺度得点との相関係数</th>
<th></th>
<th></th>
<th>下位尺度</th>
<th>項目番号</th>
<th>下位尺度得点との相関係数</th>
<th>全体尺度得点との相関係数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>SA</td>
<td>01</td>
<td>0.938</td>
<td>0.663</td>
<td></td>
<td></td>
<td>制約・</td>
<td>50</td>
<td>0.637</td>
<td>0.361</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>02</td>
<td>0.927</td>
<td>0.703</td>
<td></td>
<td></td>
<td>束縛感</td>
<td>63</td>
<td>0.697</td>
<td>0.520</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>部自</td>
<td>09</td>
<td>0.747</td>
<td>0.506</td>
<td></td>
<td></td>
<td>(FAC3)</td>
<td>15</td>
<td>0.634</td>
<td>0.593</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>内因F</td>
<td>03</td>
<td>0.694</td>
<td>0.485</td>
<td></td>
<td></td>
<td>有A</td>
<td>19</td>
<td>0.525</td>
<td>0.323</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>有A</td>
<td>20</td>
<td>0.806</td>
<td>0.539</td>
<td></td>
<td></td>
<td>お能C</td>
<td>64</td>
<td>0.594</td>
<td>0.451</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>お能C</td>
<td>08</td>
<td>0.609</td>
<td>0.462</td>
<td></td>
<td></td>
<td>けにる</td>
<td>46</td>
<td>0.670</td>
<td>0.403</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>57</td>
<td>0.761</td>
<td>0.657</td>
<td></td>
<td></td>
<td>40</td>
<td>0.676</td>
<td>0.440</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>0.704</td>
<td>0.475</td>
<td></td>
<td></td>
<td>47</td>
<td>0.661</td>
<td>0.473</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>05</td>
<td>0.583</td>
<td>0.365</td>
<td></td>
<td></td>
<td>44</td>
<td>0.742</td>
<td>0.618</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>0.621</td>
<td>0.488</td>
<td></td>
<td></td>
<td>41</td>
<td>0.724</td>
<td>0.624</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>部</td>
<td>33</td>
<td>0.838</td>
<td>0.573</td>
<td></td>
<td></td>
<td>55</td>
<td>0.727</td>
<td>0.772</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>率</td>
<td>35</td>
<td>0.811</td>
<td>0.636</td>
<td></td>
<td></td>
<td>42</td>
<td>0.672</td>
<td>0.564</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>A</td>
<td>34</td>
<td>0.695</td>
<td>0.465</td>
<td></td>
<td></td>
<td>43</td>
<td>0.601</td>
<td>0.444</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>47</td>
<td>0.709</td>
<td>0.566</td>
<td></td>
<td></td>
<td>24</td>
<td>0.791</td>
<td>0.556</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>運</td>
<td>59</td>
<td>0.777</td>
<td>0.705</td>
<td></td>
<td></td>
<td>25</td>
<td>0.766</td>
<td>0.572</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>A</td>
<td>12</td>
<td>0.599</td>
<td>0.449</td>
<td></td>
<td>30</td>
<td>0.720</td>
<td>0.452</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>36</td>
<td>0.655</td>
<td>0.526</td>
<td></td>
<td>53</td>
<td>0.742</td>
<td>0.662</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>60</td>
<td>0.678</td>
<td>0.606</td>
<td></td>
<td></td>
<td>28</td>
<td>0.587</td>
<td>0.359</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>制約・</td>
<td>61</td>
<td>0.746</td>
<td>0.585</td>
<td></td>
<td></td>
<td>31</td>
<td>0.618</td>
<td>0.519</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>束縛感</td>
<td>49</td>
<td>0.724</td>
<td>0.495</td>
<td></td>
<td></td>
<td>13</td>
<td>0.591</td>
<td>0.508</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>(FAC3)</td>
<td>62</td>
<td>0.732</td>
<td>0.594</td>
<td></td>
<td></td>
<td>29</td>
<td>0.526</td>
<td>0.383</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

注. 得られた相関係数は全て1％水準で有意であった

映するFAC4尺度（8項目）
「対チームメイト感情」要因を反映するFAC5尺度（8項目）
以上SA尺度2項目、各要因を反映する5下位尺度各8項目、計42項目。

（2）尺度の信頼性

① 尺度の内部一貫性：全調査者、大学生、高校生、中学生ごとにクロンバックのα係数を算出した。この結果、表3に示すような高い値を得、尺度の内部一貫性が確認された。

② 測定の安定性：協力の得られた一部の高校生39名、大学生42名の計81名に、2週間の間隔をおいて再調査を実施した。2週間という間隔を設定したのは、反応のキャラーコーバーの問題より、大規模の調査となる一時的影響やその他の変数の影響を考慮したものであった。高校生、大学生の資料を統合して処理した結果、再テスト信頼性は、表3に示すように0.85であり、測定の安定性が確認された。

これらの場合から、作成された尺度の信頼性は十分に高いものと認められ、妥当性を検証することが意義があることとなった。

（3）尺度の妥当性

① 構成概念妥当性：この尺度は、主成分分析・バーリマックス回転後に抽出された5因子を反映するような5つの下位尺度から構成されたものであった。このことから、各下位尺度は、因子的に純粋なものであり、因子的妥当性を満たしていると考えられた。また、抽出された各因子も、Baker and Sirky(19)の大学への適応を評定する尺度を構成する下位尺度と大枠で対応しており、内容的には運動部活動に特有なものである。これらのことから、作成された尺度は、構成概念妥当性を満足している尺度であると考えられる。
以下の結果，本尺度は妥当性についても保証されたものと考えられる。

（4）「ASSAC」の得点プロフィール

「ASSAC」における得点の平均（以下 TS 得点と略す），および下位尺度得点の平均，標準偏差を中学生，高校生，大学生ごとに算出し，各年代間の差の検定を分散分析により行なった。表 4 にその結果を示し，図 1 には，3 つの発達年代における「ASSAC」の平均得点プロフィールを合成したものも示した。

TS 得点，および下位尺度得点における各発達年代間の得点の関係を式で示す以下の通りである（＞は有意差のみられた関係を示す）。

| TS 得点 | 大学生＞中学生＞高校生 |
| TS 得点 | 中学生＞大学生＞高校生 |
| TS 得点 | ファクター 1得点：大学生＞中学生＞高校生 |
| TS 得点 | ファクター 2得点：大学生＞中学生＞高校生 |
| TS 得点 | ファクター 3得点：中学生＞大学生＞高校生 |
| TS 得点 | ファクター 4得点：大学生＞高校生＞中学生 |
| TS 得点 | ファクター 5得点：大学生＞中学生＞高校生 |

以上のように，大学生と中学生の間で有意な差がみられず，高校生は大学生や中学生よりも有意に低く，また，SA 得点についてみてみると，中学生が一番高く，次いで大学生，高校生の順となっている。高校生の TS 得点は共に中学生や大学生より著しく低く，高校生全体としてみてれば，大学生や中学生より部活動への適応感が相対的に低いといえる。加藤らは，小，中，高と進むにつれ学生生活への満足感，誇り，楽しさが増していくことを指摘しており，運動部活動における適応感についても類似した変化を示していることは興味深いことであり，このことについては，今後さら
表5. TS得点、SA得点、および各下位尺度得点の平均、標準偏差と分散分析結果

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>中学生 (n=671)</th>
<th>高校生 (n=462)</th>
<th>大学生 (n=515)</th>
<th>F値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>「ASSAC」における総得点 (TS得点)</td>
<td>191.14</td>
<td>177.84</td>
<td>194.10</td>
<td>31.174**</td>
</tr>
<tr>
<td>総括的適応感 (SA得点)</td>
<td>9.90</td>
<td>8.67</td>
<td>9.56</td>
<td>38.395**</td>
</tr>
<tr>
<td>部内における自己有能感 (FAC1得点)</td>
<td>33.00</td>
<td>32.80</td>
<td>34.53</td>
<td>7.878**</td>
</tr>
<tr>
<td>部の指導者・運営 (FAC2得点)</td>
<td>33.75</td>
<td>30.12</td>
<td>33.95</td>
<td>25.884**</td>
</tr>
<tr>
<td>制約・束縛感 (FAC3得点)</td>
<td>37.93</td>
<td>29.86</td>
<td>33.60</td>
<td>118.761**</td>
</tr>
<tr>
<td>種目・部活動へのコミットメント (FAC4得点)</td>
<td>36.86</td>
<td>37.66</td>
<td>41.43</td>
<td>44.562**</td>
</tr>
<tr>
<td>対チームメンバー感 (FAC5得点)</td>
<td>37.90</td>
<td>38.72</td>
<td>41.04</td>
<td>9.779**</td>
</tr>
</tbody>
</table>

TS得点の範囲は42～292点。SA得点の範囲は2～14点。各下位尺度得点の範囲は28～56点である。**p<0.01 (df=2,1,645)

図1. 各発達年代における「ASSAC」平均得点プロフィール

注。図の縦軸の値は、各尺度に含まれる項目全てに最も肯定的な回答をした場合を1、最も否定的な回答をした場合を-1として換算した値である。
運動部活動における適応性を規定する要因

対処様式の中に投影され、指導者や体制に対しても対抗的、攻撃的になったことが原因の１つとして考えられる。

制約・束縛感については、中学生、高校生、大学生でその捉え方に顕著な差がみられる。中学生はあまり制約・束縛を感じないようである。これは、大学生、高校生に比べると、中学生は、まだ活動に対する制約や自己に対する束縛に敏感でなく、興味や関心の幅がまだ広がっていないことが原因の１つと考えられる。逆に高校生は急速に、興味や関心の対象が広がり、それに向けた行動も可能になる。実現的には受験という問題にも取り組まなければならない時期でもあり、結果として部の活動に対して制約が生じたり、束縛感を抱くようになったと言えられる。

種目・部活動へのコミットメントについては、大学生は、高校生、中学生に比べてその程度が強いようである。興味や関心がもはや分化して大学期において、種目・部の活動に対する認知が非常に肯定的な者たちが運動部に参入している結果の現れであると考えられる。

対チームメイト感情については、その度合いにおいて差がみられるものの、中学生、高校生、大学生に肯定的である。途中の試合、合宿を経た10月から11月は部の活動がある程度社会化学されている時期であるのでこのような結果になったと言えられる。

以上の結果から、作成された「ASSAC」は、各適応感規定要因を反映する下位尺度を持つ、信頼性、妥当性ともに高いことが明らかとなった。また、各発達年代における平均得点プロフィールは、それぞれに青年期前、中期、後期の特性を反映しているものであった。このことから、「ASSAC」は、部員の適応性を評定する有効な手段となり得ると考えられる。ただし、各規定要因の SA 対する影響度を考慮することなしに、項目得点の単純加算値や、平均得点プロフィールの照合からみても部員の適応状況を推定するのには限界がある。そこで、各規定要因の SA 対する影響度を検討しておくことが必要となる。本研究では、発達の観点から各規定要因の SA 対する影響度を検討することとした。

3. 各発達年代における規定要因の相対的な影響度

作成された尺度の信頼性、妥当性についてはどちらも満足できるものであった。そこで、それぞれの発達年代における各要因の相対的影響度を明らかにするために、SA 得点を基準変数とし、各要因を反映する５つの下位尺度得点を説明変数として、各々の発達年代ごとに重回帰

<table>
<thead>
<tr>
<th>説明変数</th>
<th>中学生 (n=671)</th>
<th>高校生 (n=462)</th>
<th>大学生 (n=515)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td>標準偏回帰係数</td>
<td>F値</td>
<td>標準偏回帰係数</td>
</tr>
<tr>
<td>部内における自己有能感 (FAC1得点)</td>
<td>0.147</td>
<td>17.431**</td>
<td>0.224</td>
</tr>
<tr>
<td>部の指導者・運営 (FAC2得点)</td>
<td>0.169</td>
<td>18.256**</td>
<td>0.097</td>
</tr>
<tr>
<td>制約・束縛感 (FAC3得点)</td>
<td>0.139</td>
<td>13.924**</td>
<td>0.275</td>
</tr>
<tr>
<td>種目・部活動へのコミットメント (FAC4得点)</td>
<td>0.291</td>
<td>51.358**</td>
<td>0.236</td>
</tr>
<tr>
<td>対チームメイト感情 (FAC5得点)</td>
<td>0.112</td>
<td>8.891**</td>
<td>0.221</td>
</tr>
</tbody>
</table>

重決定係数 $R^2$ 0.457 0.528 0.499
$F(5,665)=111.84**$ $F(5,456)=102.35**$ $F(5,509)=101.53**$

*p<0.05, **p<0.01
分析を行った。変数の投入法は、1変数ずつ偏回帰係数の有意性を確認しながらその高い順に投入していくステップワイズの変数選択法であった。説明変数間の相関係数は0.36～0.59であり極端に強い相関のあるものではなく、標準偏回帰係数が0に近似するものも負になるものもなかった。このことから、多重共線性はみられず、抑制変数として働くものも多い事が示された。表6に重回帰分析の結果を示し、図2には発達年代間の標準偏回帰係数βの値の変化を示した。この結果、大学生における部の指導者・運営の要因以外の要因全てに有意な正の標準偏回帰係数が認められた。影響度の相関の高い順位を表6に示すと下記のようになる。

中学生：FAC4>FAC2>FAC1>FAC3>FAC5
高等学校：FAC3>FAC1>FAC5>FAC4>FAC2
大学生：FAC5>FAC1=FAC3>FAC4>FAC2

これらの順位を各発達年代間で比較してみると、各要因の影響度における発達の変化が顕著に現れてくる。部の指導者・運営の要因とチームメイト感情の両要因は、共に広義には対人的要因と考えられる。しかし、その影響度の変化は、各発達年代間において対照的である。中学生段階では、チームメイト感情の要因のSAに対する影響は、相対的には4要因の内で最低であったが、高校生段階では3番目に、大学生段階に至っては最大に、と大きな変化をみせている。逆に、部の指導者・運営の要因は、中学生段階で2番目であったものが、高校生段階では最低、大學生段階でも相対的影響度は最低で高校生段階より小さくなってきている。この結果は、大学生チームの発展性にチームメイトの要因が大きい影響を与えているという阿江の研究結果を支持するものと考えられる。また、青年期においては、その発達段階が進むにつれ、親や教師など特定の人への依存から共同や連帯を求めるようになるという青年期における対人関係の特徴が如実に現れた結果と考えられる。

制約・束縛感の要因の影響度も大きな変化が示されている。中学生段階では4番目であったものが高校生段階で最大となっている。大学生段階では相対的には3番目へ再び後退するものの、やはり大きな影響を及ぼす要因と捉えられる。高校生段階というものは、ほぼ青年期中期にあたり、この時期は、内面的自己の観察・反省・形成に役立つ時期であり、内外的世界を発見する時期である。また、種々の権威や規範から開放されようとし、自立・独立への方向性を進めている段階である。関心は内面にも外界にも広がる時期にあり、制約・束縛感に敏感になる
時期である。このことから高校生段階においては、制約・束縛感が強く適応感に影響を与えていると考えられる。

種目・部活動へのコミットメントの要因は、中学生段階において大きな影響を与えている。中学生における部活動への参加のきっかけは、学校からの強い要請や、友人の誘いによるものが少なくな、高田らは、友人誘われる入部し、その活動に関心が高まることなく活動を継続するも、対人関係に問題が生じたりして不適応に陥った事例をあげている。新奇、あるいは未知の集団に参加した際、その集団規範やそこで行なわれている活動自体に関心がもたない時、同時に他の要因が適応にとって否定的に働かなければ不適応に陥りやすくなると考えられる。部活動は、中学生になって初めて体験するものであるので、この要因の影響が強く現れると考えられる。高校生、大学生においては、すでに中学で部活動を経験する者が多く、部活動参加者のコミットメントの程度はある程度安定している為、相対的に順位が下ったものと考えられる。

部内における自己有能感の要因は、各年齢年代を通じてある程度以上の影響を与えており、中学、高校、大学を通じて、競技指向の運動部においては技能を高めたり、なんらかの形で部に貢献するのが部集団（環境）からの要請である。この要請に応えられるかどうかの判断は、現実の自己の技能、あるいは部内における自己の存在価値に対する認知に影響される。従って、この要因は、中学、高校、大学の運動部活動における適応感に一定の影響を与えていると考えられる。

以上のことから、5つの要因はそれぞれに適応感を規定する要因であるが、その相対的影響度は、各年齢年代の特徴を反映して変化していることが明らかになった。

要 約

近年、学校や部活動への適応の問題に関心が持たれてきている。体育・スポーツ心理学の分野でもこの問題は重要なテーマとなるべきであるが、これまでこの問題を実証的に取り扱った研究は非常に少なかった。本研究は、このような現状認識に立ち、1）運動部活動における適応感を規定する要因の解明、2）運動部活動における適応感評定尺度の作成、3）発達的な観点から、各規模要因における適応感への影響度の検討を行い、新たなことを目的とした。中学、高校、大学の運動部員を対象とした調査により以下のような結果を得た。

1）運動部活動における適応感を規定する要因として「部内における自己有能感」、「部の指導者・運営」、「制約・束縛感」、「種目・部活動へのコミットメント」、「対チームメント感情」の5つの要因があることが明らかにされた。

2）総括的に適応感を規定するSA尺度と5つの要因を反映する5下位尺度、計25項目から構成され、信頼性、妥当性共に高い「運動部活動における適応感評定尺度（ASSAC）」が作成された。また、各年齢年代におけるASSAC平均得点プロフィールは、それぞれ青年期前期、中期、後期の心性を反映しているものであった。

3）5つの適応感規定要因の相対的影響度は、中学生で「種目・部活動へのコミットメント」、「部の指導者・運営」、「部内における自己有能感」、「制約・束縛感」、「対チームメント感情」の要因の順に、高校生で「制約・束縛感」、「部内における自己有能感」、「対チームメント感情」、「種目・部活動へのコミットメント」、「部の指導者・運営」の要因の順に、大学生で「対チームメント感情」、「部内における自己有能感」、「制約・束縛感」、「種目・部活動へのコミットメント」、「部の指導者・運営」の要因の順に強いことが示された。また、これらの順位の変化は、各年齢年代における心性を反映しているものであった。

なお、今後の課題として、1）各年齢年代における「ASSAC」の5つの規定要因を反映する下位尺度得点の総括的適応感に対して持つ意味合いをさらに詳細に検討すること、2）適応という力動的な概念を理解する為に縦断的研究を
っていくこと、の2点が挙げられる。

付記：調査の実施に際しては、土浦市立第4中学校、つくば市立立中学校、筑波学園高等学校、相模大谷、栃木県立小山高等学校、常総学園高等学校、筑波学園高等学校、土浦市立高等学校、長野県立明治高等学校、明治大学、静岡大学、滋賀大学、筑波大学の多くの先生方、運動部員の皆様に多大のご協力を顶きました。また、筑波学園教諭柴田淳氏、群馬県立中央高等学校教諭松本総氏、松原達哉筑波大学教授、大西武三筑波大学助教授、東京女子体育大学講師阿江美恵子氏の各氏には、運動部活動における適応に関する問題、あるいは調査項目に関する問題で、貴重な示唆、助言を頂きました。記して感謝の意を表します。

注

注1）本研究においては「適応」を、人格諸理論における適応概念21)、11)、17)、24)や豊島ら25)を参考にし、「生活体と、環境との相互作用の結果であり、適応しているというのは、個人が、その環境との相互作用において、苦痛、不安、過度の緊張、葛藤等の心理的不安定感を感じず、精神的に健康な状態にあり、その環境の中において、自己表現の可能性を意識的、あるいは無意識的に認めていること、または、その自己実現に向けて行動していること」と定義し、状況と過程の両面から検討されるべき概念と捉えた。また、運動部活動における適応感については、豊島ら25)や加藤ら9)を参考に「部員個人が、部生活において自己を良好な適応の状態にあると意識していること、あるいは、その状態が近い将来獲得する可能性を認めていること」とした。

注2）部員の「適応」を客観的に把握するのは、極めて困難な問題である。本研究ではこの問題を解決すべく多側面から部員の適応感を評定し得る尺度の開発を行うことが目的の1つであった。尺度の妥当性の検討の為には「適応」の指標が必要となるが、これまでのところ適切な指標となるべきものは見当たらない。そこで本研究では、豊島ら25)の大学への適応に関する研究を参考に、部員の主観的な認知であるトータルで総括的な適応感をもって「適応」の指標とすることとした。

注3）この質問紙は、文書で研究の趣旨、及び意義を説明し、記入内容について、保守義務の遂行を約束したうえで、協力の得られた指導教官により配付した。なお、「不適応状況」とは、ただ単に部の活動に消極的であるということではなく、精神的な問題を抱え、教師や親などから何らかの指導・助言が必要と思われる状況と説明された。

注4）従来多くの体育・スポーツ心理学分野の研究において因子数は、ガットマン・カイザーの基準やスクリーテストにより決定してきたが、「どちらの基準もうまく機能するとは限らない」、実際には、因子の解釈可能性という面から考えることも多い。」(村上31)とされていることから、本研究ではまずこれに従い、検討したうえで5因子とした。さらにスクリーテストの指標となる固有値の変動状況についても確認してみたところ、やはり第5因子から第6因子にかけて固有値は急激に低下していた。

引用・参考文献

1) 阿江美恵子「集団複数個体の再現」スポーツ心理学研究、13: 116-118, 1986。
2) オルポート（訳者武俊、青木孝悦・近藤由紀子・垣正共訳）、パーソナル・セラピース、新曜社、1982, Pp. 488 (特に、pp. 40-41)。（Allport, G.W., Personality ; a psychological interpretations, Henry Holt and Co.: New York, 1937.）
5) EIS学校モラール研究会編、SMT学級適応診断検査、日本文化科学社、1967, Pp. 4。
7) 今橋勝幸・林 信佐・藤田昌士・武藤芳照（編）、スポーツ心理学への適応に関する研究, 等。
運動部活動における適応感を規定する要因

26) 豊田秋彦・青野晴男・清俊夫・細川浩「大学新生における人格適応の変遷と大学教育; 学生相談の課題; 社会心理学的接近」 弘前大学保健管理概要, 5(2), 1981.